

経験を記述する

現象学と質的研究

人々の経験を理解することを志向した研究方法は、たくさん紹介されている。研究の蓄積もあり、一定の成果もみられる。例えば、患者の経験を理解することは、その人の状態に応じたケアの実践を考えることを助ける。ある困難な状況に置かれた者の経験は、それを生み出す社会的枠組の問題性を、私たちに突きつける。経験を積んだ専門家の語りや実践は、その固有の実践の特徴をあぶり出し、同時に実践の継承として機能する。人々の経験を理解しようとすることは、互いの経験を交換し、新たな実践を生み出していこうとする私たちの営為でもある。

この、「経験を理解する」という営みにはいくつかの次元がある。これまでの多くの研究では、ある状態にある者の「経験内容」を探究することに関心が注がれていた。経験内容の探究では、そのような状態にある人々に“共通して”みられる事柄を求め、概念モデルや理論構築がめざされる。この取り組みは、経験を学問知へと練り上げていく1つの方向と言ってもいいだろう。

しかし、知を生成する方向性は1つに限定されてはいない。経験の理解は、経験内容の理解とは別の次元から問われなければならない。私たちの実践を見てみると、いくつもの問いが生まれる。他者の経験を知りたいという関心は、いかに生まれてくるのだろうか？ これは、関心をもつ者ともたれる者の関係を分離したのでは見えてこない。人々の経験は、いかに生まれ、記述され、分かちもたれる(理解される)のか？ 経験を知るという試みは、いかなる方法論において達成されるのか？ こうした問いは、経験がまさに生み出される次元へと私たちを誘う。

これまで、文脈をもった個別の経験、具体的な場面の1つひとつを丁寧に記述し、そこに浮かび上がる普遍性を追究する方法論はあまり論じられてこなかった。1人ひとりの経験がいかに成り立っているのか、1つひとつの場面からいかなる実践が浮かび上がっているのか。それが、どのように知を生み出しているのか。これらを記述することは、実践的な研究を確立していく上でも、いままさに求められている取り組みであるだろう。それゆえ本特集では、「経験を記述する」ことに注目する。文脈に支えられた経験を探究する方法論についての論考、病む者や実践家たちの経験の記述を通して、その記述にいかに普遍性が孕まれ得るのかを論じてみたい。

企画：西村ユミ(首都大学東京健康福祉学部教授)